

《特別連載》

## 家族面接の実践から里親家族支援を考える

### その3 京都国際社会福祉センターの家族面接

坂口 伊都

早樫 一男

千葉 晃央

大谷 多加志

#### はじめに

前号に引き続き、特別連載3回目を迎えることができました。今回は、坂口が担当させていただきます。第1回は、ジェノグラムから里親家族に思いを巡らせ、前号では「家族理解」と「家族支援」の視点から里親家庭について整理していきました。何となく感じていた事柄が文章となると、改めて里親家庭が複雑な関係性を抱えながら家族を成り立たせていることが見えてきました。

里子は、里親、里兄弟姉妹、実親、里親の親戚、支援者、地域の人々等、いろいろな人が関わっています。「親」とつく2つの家族が存在するだけでも、子どもから見ればわかりにくく混乱しやすくなります。里親の方も里子と実子の違いを感じたり、出会う前の里子の姿を知らなかったり、親戚や地域に里親制度を理解してもらえずに苦労したり、様々な難しさに出くわします。また、里子とのトラブルが続いていけば家族ではいられなくなる現実が横にあり、それを意識しながら支援者と協働し、家族を築き、里子を含めた家族を維持し続ける労力は相当なものと言えます。

里子が里親家庭に入り、未知なる新たな環境に適応していくのは、想像以上に大変な体験でしょう。家族の関係、暗黙のルール、生活様式の変化、苗字が変わる子もいます。転校先でクラスメイトや保護者達に自身の存在をどう紹介していくのか等、里子自身がどう行動すればいいかわからないことだらけでしょう。里親家庭は、始める段階から様々な事柄を抱えながら、慣れない道のりを歩んでいかなければなりません。どこの家族も関係が良好な時もあれば、バランスが崩れている時もあります。里親家庭が、新たな家族のバ

ランスを築いていくことは簡単なことではありません。里親を支援していく際、この「家族」の視点は欠かせないものではないでしょうか。

そこで今回の特集では、著者がかかわってきた『京都国際社会福祉センターの家族面接』を紹介します。

## 京都国際社会福祉センター

京都市伏見区の桃山の山手の住宅街を抜けると京都国際社会福祉センターが見えてきます。目の前に小さな公園があり、子ども達が遊ぶ声が聞こえてくることもある、落ち着いた雰囲気の中にあります。社会福祉法人京都国際社会福祉協力会が母体となり、1983年から対人援助職の現任者向けの研修会を多数開催しています。その一つにジョン・D・シメオン氏による家族療法の研修があり、対人援助学マガジン編集長の団士郎氏や、この特別連載の早樫一男氏も講座を受講し、現在は両氏が「家族理解のための講座」を複数担当されています。その講座を千葉さん、大谷さん、坂口も受講してきました。

### 特集メンバー紹介

早樫一男：児童家庭支援センター「山城こども家庭センターだいわ」センター長。京都府の児童相談所等で長年心理職として勤務し、同志社大学心理学科教授を経て、2014年より児童養護施設/乳児院「京都大和の家」統括施設長を務める。2023年度より、センター長に専念。対人援助学マガジンでは「家族造形法の深度」「日本のジェノグラム」を連載。

千葉晃央：京都光華女子大学健康科学部医療福祉学科社会福祉専攻講師。京都国際社会福祉センターで家族療法を学び、障害福祉領域の現場で長年の実践を行う。2020年から2021年に京都府家庭支援総合センターで里親支援に携わり、立命館大学が行うフォスタリング・ソーシャルワーク専門職講座の運営にも関わる。

大谷多加志：京都光華女子大学健康科学部心理学科准教授。2003年から2020年まで京都国際社会福祉センター発達研究所で勤務。家族療法について集中的に学んだ経験がないことを武器に聴き手として座談会に参加し、本特集メンバーに加わる。2012年から対人援助学マガジン編集員を務める。

坂口伊都：家族関係支援・相談支援 憩都（いと）主宰。大学教員、NPO 法人チャイルド・リソース・センター、スクールソーシャルワーカー等の経験を持ち、京都国際社会福祉センターで家族療法を学ぶ。現在は、家族支援や専門職養成に関わる。対人援助学マガジンでは、自身の里親体験をもとにした「養育里親 — もうひとつの家族—」などを連載。

家族理解のための講座の他に社会福祉講座、治療教育講座、対人援助職のための講座、ケース検討から学ぶ発達障害児・者支援等、数多くの研修を社会人の方が参加しやすい時間帯に開催しています。受講生は近畿圏のみならず、全国各地の援助職が学んでいます。自治体によっては、職員研修としてプログラムされ、定期的に受講し、支援者のスキルアップを図っています。

## 家族面接

京都国際社会福祉センターでは、研修だけではなく、「のぞみ親子相談室」の一機能として、家族面接による相談を受けています。早樫さん、千葉さん、坂口はそこでファミリーセラピスト(以下 FTh と表す)をしています。京都国際社会福祉センターの家族面接は、以下の 5 つの特徴を持っています。

1. チームとなってケースを受ける
2. 家族面接をビデオ撮影している
3. 10 回程度をワンクールと設定している
4. ジェノグラム面接をしている
5. 次の面接までに家族でできてもらう事(宿題)を提案している

面接室には、家族と面接担当ファミリーセラピスト(1名)の椅子を丸く並べ、その中央にマイクが置いてあります。ワンサイドミラーがあり、観察室では他のチームスタッフが家族面接の様子を一緒に見て聞いています。

家族には、好きな席に座ってもらいます。FTh の紹介、他のスタッフが一緒に聞いていること、動画撮影をするが、家族面接をより良いものにするために見返すため、外には出さないことを伝えています。希望があれば、家族面接後に観察室の様子を見てもらうこともできます。

家族面接は、

「どなたからでも結構ですので、ご家族の紹介をしてください」

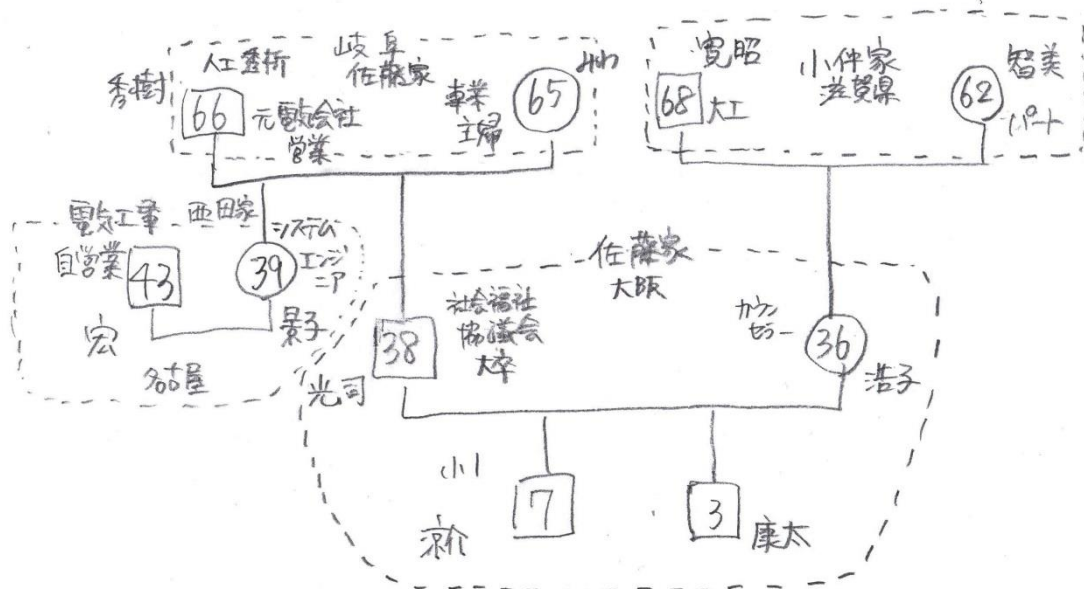
から始めます。ジェノグラムを描きながら、名前や年齢、職業等を尋ね、面接担当 FTh は記入していきます。

家族の歴史、家族の呼び方、暮らし方の変遷等を話題にします。

家族にもジェノグラムを見てもらいながら書いていく作業は、何も家族のことを知らないFThに伝えようとする意識が働くようです。教えようとしてくれた事柄から、質問を重ねていくと、抵抗感をあまり感じずに応じていただいています。



ジェノグラム 見本（架空の事例です）



家族面接をする際は、家族を理解するために3つのワードを意識します。

### 家族理解の3つのワード

- ① サブシステム…家族の中の小さな単位(夫婦サブシステム、両親サブシステム・きょうだいサブシステム)がどのように機能しているか
- ② 境界…世代間境界、内と外の境界が保たれているか
- ③ パワー(決定)…権威、決定、支配、管理の側面 誰が決めているのか

詳細は、

団士郎著『対人援助職のための家族理解入門 家族の構造理論を活かす』中央法規

早樫一男著『対人援助職のためのジェノグラム入門 家族理解と相談援助に役立つツールの活かし方』中央法規

早樫一男編著 千葉晃央 寺本紀子著『ジェノグラムを活用した相談面接入門 家族の歴史と物語を対話で紡ぐ』中央法規

をご覧ください。

例えば、「子どもさんの進路はどのように決めていったのですか？」と尋ねるとします。

A 家族は、「子どもが行きたがったので」

FTh「それは、子どもさんの方から打ち明けられたのですか？」

A 家族「いえ、先に母親が聞いて、母から父に話しました」

B 家族は、「両親に言われたので」

FTh「そこは、〇〇さんも希望していたところだったのですか？」

B 家族「えー、まあ…」

AとBの家族は、進路の決め方が違いました。それぞれの家族の返答から、3つのワードを意識した質問を展開していきます。A家族は、子どもと母親の境界、両親サブシステムがどのように働いているのか気になります。

B家族の方は、パワー(決定)が家族のどこに集中しているのか確かめます。

家族の話を一通り聞いてから、**一旦休憩**を入れます。

面接担当FThは、別室で面接を見ていたチームと合流し、今後のことについて話します。そのことは、家族にも伝え、家族の皆さんには、控え室で休憩してもらいます。

別室では、家族の印象、聞き取りにくかった部分の確認、家族が抱える課題、ここでの家族面

接の方向性(扱うテーマ)、次回の予定と宿題等を考えます。実際に面接している者と観察室で見ている者の間では家族の印象が違うこともあります。家族と面接をしているFThは、他のチームメイトが同時刻に客観的に見て意見をもらえることで、次回の家族面接に向けて冷静に考えることができるので、面接時は家族の話に安心して集中することができます。

**宿題**は、その家族に合わせて考えます。

例えば、

家族全員で目的地を決めて出かけてもらう

次回は、来ていない家族と一緒に家族面接に行くように誘ってもらう

子どもに晩御飯を作ってもらう等

家族がこれまで実施/体験したことがないような事柄を提案することが多いですが、その宿題をしてこなくても構いません。次回の家族面接で、何故しなかったと思うかを話題にします。

休憩が終わると、また家族に部屋に入ってもらい、どのような話題が出ていたか、質問や宿題の内容等を伝え、次の予約について話をして面接を終えます。

簡単ですが、以上が家族面接の流れとなります。そして、回を重ねるにつれて家族の対話が深まっていきます。最初にだいたい10回で一区切りすることを予告しているので、後何回で終わるのかをFThも家族も意識し始め、終結に向けての心構えをしていきます。ケースによっては、10回を過ぎても、必要があればテーマを変えて継続していくこともあります。

## 家族に起こっていること

日常生活の中で、家族の問題について話し合うことは難しいことです。話をしても、取り合ってもらえなかったり、感情がぶつかり喧嘩になったりして、話し合いになりません。家族面接では、第三者が介入することで、自分が話す時は、FThにもわかるように丁寧に伝え、その言葉は他の家族の耳にも届きます。その繰り返しで、家族でじっくり話す空間を作ります。FThは、第三者として家族の話を整理し、あまり話しをしていない家族に、他の家族の話聞いたことがあるか、聞いてみてどう思うか等の話題を振ったりし、発言者が偏らないように気を配っていきます。こうして「家族の対話」が成立していきます。対話の中で、家族の思いに驚いたり、自分の中の整理をしていく作業をしていきます。

また、「宿題」が出されることで、それをどうしていくか話題にするだけでも、家族が協働する機会となります。家族面接を希望する人の中には、風邪薬のように家族の問題が解決するのではないかと期待する人がいますが、宿題をしたからといって、家族の問題が解決されるというものでは

ありません。宿題と向き合い、実践し、やってみてどうだったか振り返ることが、家族の新たな行動様式となっていきます。上手くいっているようなら続けられればいいですし、上手くいかなければ家族と一緒に考え、新たな宿題を考えていきます。家族が協働して試行錯誤する経験が、これからの家族の可能性となり、家族が何かトラブルが起きた時に対処していく力となります。

家族一人ひとりが力をつけていくケースでは、次のことが起こっています。

**家族でも、それぞれ違う考えを持つ個だと知り、  
家族が対話できる体験をし、  
答えを一つに決めず、試行錯誤をしていける**

これを家族で実践できると、自分たち家族で問題を解決できるイメージを持てます。

家族を長く営むことは、誰であっても簡単ではありません。里親家庭なら、なおさらです。世の中にこれが正解という答えがないものを家族も支援者も一緒に考え、試行錯誤することで次を考えることができます。家族として子どもを迎える里親家庭だからこそ、家族を視点に入れた支援が求められるのではないのでしょうか。里子との関係に衝突が起こると、生活を回していくことで手一杯となり、これからが見えなくなります。そこに、次を考えられる支援に、大きな意味があると私たちは考えています。